

Intelligent Café における新しい学びの取り組み(2)

— 自由な学びの場としての Intelligent Café —

Operating Intelligent Café and Creating a New Learning (2)

— Intelligent Café as a free learning place —

SULE 委員会

坂井 英夫 塚越健一朗 齋藤 洋輔 加納 隆徳 永尾 瑠衣 宮城 政昭
池尻 良平¹ 赤星 勇輝² 岸本秀二郎³ 永瀬 浩平³

<要旨>

本校は、平成 24 年度よりスーパーサイエンスハイスクール事業の取り組みの一環として、自由な学びの場としての Intelligent Café（以下 In-café）の運営に取り組んでいる。1 年目、2 年目の In-café での取り組みについては、本校研究紀要第 50 集¹⁾、第 51 集²⁾において、「Intelligent Café の運営とコーディネーション能力の育成」、「Intelligent Café における新しい学びの取り組み」で報告している。3 年目の本年は、In-café を運営する中で、生徒に醸成される総合的なコミュニケーション能力を、「自由な学びの場」としての自主的な取り組みや、「人とつながる場」としての運営講座、心理科学講座、Queque などの取り組みと連携して達成できたか報告をする。

<キーワード>

Intelligent Café (In-café)、コーディネーション能力、自由な学びの場、心理科学講座、Queque、東北スタディ

1 はじめに

本校の In-café は、平成 24 年度に指定されたスーパーサイエンスハイスクール事業（以下 SSH）の取り組みの一環として、運営をはじめてから 3 年がたつ。In-café は、本校の SSH が理系に特化した人材育成を目指すだけでなく、グローバル化した社会の中でも活躍できる真のリーダーの育成を目指しているために取り入れられた SSH 事業の柱となる活動のひとつである。

In-café での生徒の活動は、総合的なコミュニケーション能力としてコーディネーション能力を育成し、生徒たちの自由な学びや、やりたいことを実現できる機会として機能することを目指している。しかし、「自由な学びの場」、「人とつながる場」という機能を充実させる方向の取り組みを、教員が大量に用意したため、昨年度はあまりにも多くのイベントが In-café に集中し、スタッフに疲れが見え出した。このため、今年度は、多くの部分をインカフェスタッフの自主的な運営に任せ、本来の「自由な学びの場」や、「人とつながる場」の形成を目指した。そこで、通年に渡る講座は、運営講座、心理科学講座、Queque の 3 つに限定し、「少し変わった進路講演会」以外は、教員からのイベントの提供を控えた。その結果、In-café スタッフの忙しさは解消されたが、スタッフ以外の生徒が In-café を訪れる機会が減少してしまった。

2 今年度の In-café の活動

2-1 生徒の自主的な運営

昨年末から東北スタディを In-café で実施するかどうか議論になった。

1 年目は東日本大震災の体験者や外部からの参加者も集めて「高校生はボランティア活動をやるべきか」という討論会を開いた。そして、討論しているだけでなく実際に現地を見て欲しいとの示唆から、石巻や気仙沼の被災地を訪問する東北スタディを実施した。

2 年目は復興をテーマに掲げ、南相馬市の職員の方や一般参加者も交えて、「原発事故からの復興とまちづくり」という討論会を開いた。また、現地でも石巻市役所を訪問し、行政の立場から復興について話を聞いた。

3 年目に当たり、自分たちで東北スタディを企画の段階から検討するように促したところ、「東北スタディだけが In-café でやることではない」との結論に至り、残念ながら In-café が主催する東北スタディはなくなった。

同様に先輩たちが築き上げてきた 10min-Talk やランチトークなどのイベントも姿を消していった。イベントがなくなると自習以外で In-café を訪れる人は減り、イベントを企画しても、スタッフ以外にはあまり集まらないという悪循環になった。昨年提案された先生を巻き込んだ企画「世界一やりたい授業」も、一つの企画の挫折

¹東京大学大学院情報学環

²東京学芸大学教育学研究科

³東京大学大学院教育学研究科

によって、その後企画されなくなった。本来なら、色々な失敗を許される空間であるはずが、スタッフの中では、いつの間にか失敗が許されない世界に変わってしまった。また、新入生が入学した時は頑張っていた2年生も、自分の活動が忙しくなり、自然にIn-caféから足が遠のいた。In-caféにやってくるイベントを次から次へとこなし、イベントの運営に明け暮れた日々は、スタッフにとっては忙しく大変であったが、In-caféに生徒を集める効果があった。このような正解のない取り組みに於いて、生徒の自主的な活動をサポートすることの難しさをあらためて痛感している。

2-2 生徒がやりたいこと

生徒全体に対するアンケート結果によると、In-caféで生徒がやりたいことは主に4つに焦点化される。1つ目は自習や雑談、個人の趣味について語り合いなど、個人的な活動。2つ目が講演、座談会、バンドのライブ、興味ある分野の発表などのイベント、3つ目が、レポート研究、化学系、英語関係、美術館特集、農学系、文系の企画など学習に関わる企画、そして4つ目が、「カフェ」としての機能向上である。「カフェ」というのだから、お菓子と飲み物は常備して欲しいというのが、生徒からの希望である。そしてリラックスできる快適空間を期待する声は、1年から3年まで共通である。

自習に使える環境の整備の声は3年生に多い。3年生は、選択科目が多く、空き時間に自習をする場所としてIn-caféに期待している。2年生は、クイズ大会、大喜利大会、落語会、季節のイベント、バンド演奏、イベントや発表を期待している。一方、1年生は、レポート研究や英語関係をはじめとする学習に関わる活動を多く求めている。

一方、教員からは、読書会、授業では扱えないような話、昼のトークの復活などの意見が寄せられた。今年度も、教員からの提案として、心理科学講座、インカフェ運営に関する講座については、ほぼ毎月講師をお願いして実施した。また、「ちょっと変わった進路講演会」についても、卒業生を中心に機会があるごとに実施して来ている。本来なら、知的会話を楽しむ場としての成長や講演を聞いて質問をするだけでなく、自分自身の考えも発表するなど、生徒の自立を求め、多くの先生を巻き込むようなイベントの企画をするなどの、取り組みを期待したいところだが、もう少し時間が必要ようだ。

2-3 In-café スタッフの悩み

In-caféのスタッフの取り組みとしては、「生徒がやりたいことをやる」という側面と「In-caféという空間を確保・運営する（毎日誰かがここにいる）」という側面がある。

「議論したい」、「授業外で知的好奇心を満たしたい」、「知識を増やしたい」「共通の興味を持っている人に出会う雰囲気作り」などが、スタッフからあがったやりたいことである。

一方、運営という側面になると、「広報・ポスター作りを誰がやるか?」「企画の受け皿を誰がやるか?」「やりたい人がいるのか?」など、ある程度のシステム作りが必要ようだ。

- 運営という側面では、先輩からの引き継ぎは重要で、
- ①システムを作る→ わかりやすいルールを作り誰でも企画をやる（運営の負担を少なくする）。
 - ②やりたいことをやる（「どうしたらいいですか?」と聞ける）。

などの環境を整備しないと、せっかく企画があっても、まわす人がいないという事態や、まわし方がわからないということになってしまう。一方、スタッフも「企画の中心メンバーにならない」など、スタッフとしての関わる自由度を大きくとると、担当するスタッフが固定化し、「入りづらい」、「ハードルが高い」などの問題点が出てしまう。

In-caféという場所は、どんどんやりたいことをやって、どんどん失敗しながら成長して行く所であると考え、スタッフの関わるスタンスとしては、「やりたいことからスタッフをしている」という主体的関わりが必要だろう。

関わっている教員も、失敗を恐れず、できる限りのことを実現させてあげる必要がある。そういう意味では、「やりたいことをやりたい人がやる」という体制でやっていた初年度の取り組みに立ち返る必要があるようだ。教員としても生徒以上に、枠組みにとらわれない柔軟な運営のバックアップが必要である。図1にスタッフによる現状分析を示した。

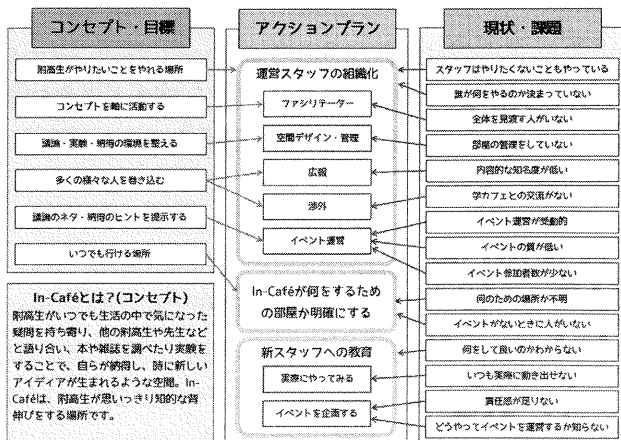


図1 In-café スタッフによる現状の分析

2-4 生徒の In-café 利用状況

本校の生徒が In-café を、どのように利用したかを調査するために昨年に続き、2014 年 11 月に全校生徒を対象に質問紙調査を実施した。回答数は 671 名であった。

まず「In-café に行ったことがあるか？」の問いに対して「ある」が 402 名で 60% という結果となった。これは、昨年の利用者の割合の 51% 比べ、増加している（図 2）。

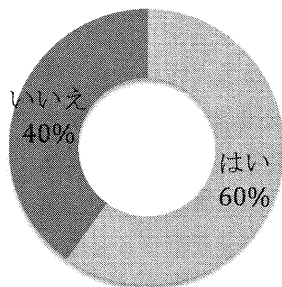


図2 In-café に行ったことがあるか

また、3 年の空き時間の自習での利用は、昨年同様約 100 名で、学年全体の約 34% あり、インカフェの自習のペースとして利用が定着していることがわかる。本校には、生徒の自習スペースが不足しているのもその要因と考えられる（図 3）。

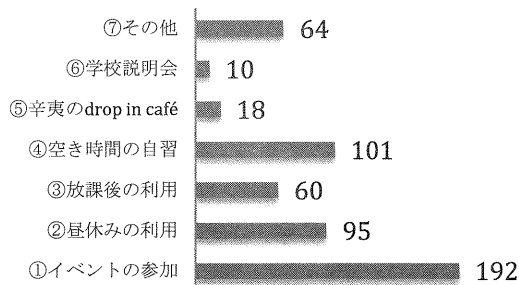


図3 In-café に行った目的（人数／複数回答可）

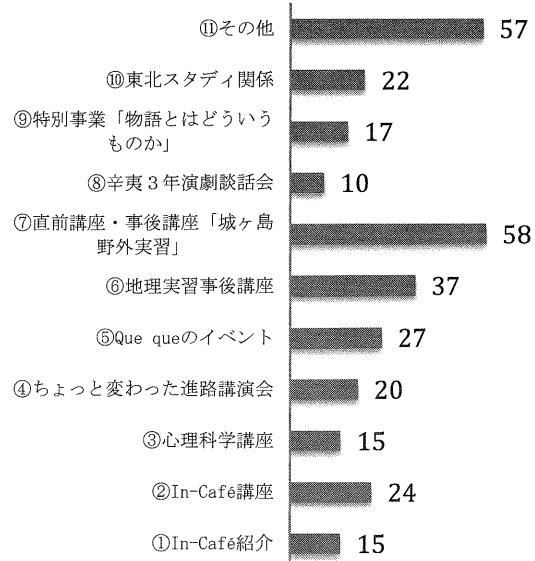


図4 参加したイベント（人数／複数回答可）

純粋なイベントへの参加者は、昨年の 360 名、39% から、302 名、45% となり、人数的には減少しているが、参加者の割合が増えた（図 4）。ただし、イベントに参加する生徒が固定化する傾向があり、「人とつながる場」という機能の PR が十分できなかった。昨年のイベント別の参加人数の中で、一際数の多かった「教員によるランチトーク」など、昼休みに実施して来たイベントがほとんど実施できず、In-café の認知度が減少してしまったのかもしれない。一方で、外部から企画者がやってくるイベント（Queque や心理科学講座など）の参加者の少なさが目立つ。これらのイベントは企画としては面白いが、その内容を生徒に伝えきれていないようである。

In-café でやったら面白いのではないかと教員が主導で持ち込んだ企画の中には、担当のスタッフ以外の生徒の共感を得られず、参加者が集まらないケースがあることは昨年も報告している。ただ単に宣伝がうまく行けば人が集まるという単純な構造ではなく、生徒のニーズやタイミングなどにより、口コミなどによる伝搬が起こらないと多くの参加者が集まらないようである。また、放課後は、クラブ活動や行事等の様々な活動を生徒がしているため、そもそも「In-café にやってくる時間がない」と回答してくる生徒も多い。特にクラブ活動による拘束力は非常に強いため、特別講座などにもなかなか参加できない生徒が多い。口コミによる伝搬と生徒の自由な選択が可能な状態がないと集客は難しい。

2-5 生徒による In-café の評価

次に「イベントに参加して良かったこと」について複数回答で選んでもらった（図5）。今まで同様、多くの意見が集まったものは「①新しい知見に接することができる」、「②授業では得られないことが学べる」、「⑧楽しい」であった。今年度は「教員によるランチトーク」がほとんど実施できなかったこともあり、昨年まで多かった「④先生の違った面が見られた」は急落した。In-café でイベントを開くことは、このように生徒の In-café の評価に直結していることがよく分かる結果となった。

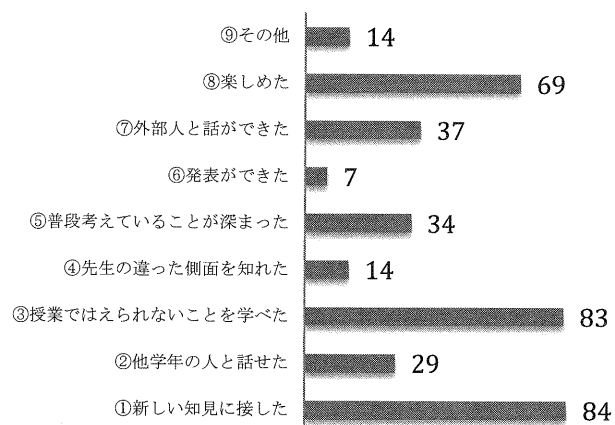


図5 イベントに参加して良かったこと

In-café に多くの参加者を集めるためには、広報活動は重要である。今年度もイーゼルやポスターを中心に宣伝を行ったが、口コミによる効果が36%と最も多かった。

数多くのイベントを毎回周知させるためには、In-café 専用の掲示番や、1週間や1ヶ月単位のスケジュール表を示すなどのほか、In-café のホームページや SNS・Facebook のような広告媒体の整備も必要となる。しかし、図6の宣伝の効果についてのアンケートによると、In-café のイベントへの参加のきっかけとなった情報源

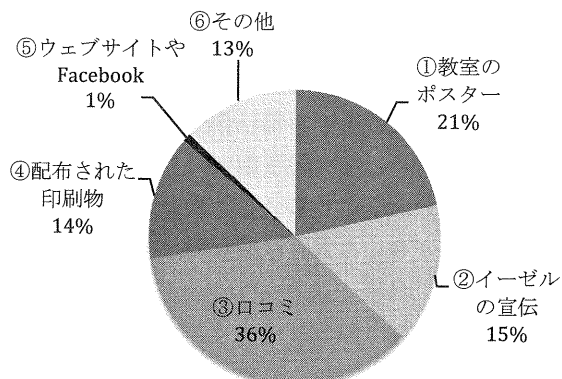


図6 宣伝と参加したイベント

をみると、参加者は何らかの形でイベントの情報に接し、また、その情報に興味を持った友達から口コミでその情報を入手して初めて行動に繋がる生徒像が見えてくる。一方、web サイトや Facebook 等の SNS を利用した新たな情報発信は、既に In-café の活動に参加した人にとっては便利であるが、一度もイベントに参加したことない生徒が、情報を共有する方法として期待できそうにない。（文責：宮城）

3. 東北スタディツアー

本章では、In-café で継続的に実施されてきた東北スタディツアーと、公民と地学のコラボレーション授業「リスク社会と防災」との連携の様子について紹介する。なお、コラボレーション授業や東北スタディツアーの内容については、加納・齋藤（2014）や加納・齋藤（2015）に詳しい。

3-1 「リスク社会と防災」

・東北スタディツアー連携の意図

本校 SSH の事業の一つに「特講 科学の方法」がある。複数教科の教員がコラボレーション授業を行うことで、一つの現象に対する多面的な視点を養うことを目的としたものである。公民と地学でも「合意形成」と「防災教育」をテーマにコラボレーション授業「リスク社会と防災」を行い、より深い議論を目指した。

また、本校 SSH は、キーコンピテンシーを中心に据えた教育カリキュラムの開発に取り組んでいる（キーコンピテンシーについてはライチェン・サルガニク（2006）に詳しい）。キーコンピテンシーにおいて重視している点は、「行動に移すことができる」ことである。「合意形成」も「防災」においても、知識を得て、議論を交わすだけでは不十分な面があり、具体的に調査を行ったり、問題解決に向け行動に移したりする態度が必要であると考え。そこでこの連携の意図としては、コラボレーション授業「リスク社会と防災」を踏まえ、東北スタディツアーを実際の行動の場として捉えて、行動に繋がる学びを提案するものである。

3-2 In-café との連携

現代社会の授業において、2年生4クラスに対しては「リスク社会と防災」を実施できたものの、2年生の残りの4クラスと1年生の8クラスは授業を行っていない状況であり、これらのクラスを対象に In-café で6/23(月)と7/1(火)の2日間に授業を実施した。しかし、広報活動の不徹底や定期テストの準備期間と重なったことな

どの理由により参加者は大変少ない結果となり、授業で行ったようなロールプレイ形式のものは実施することが出来なかった。来年以降、効果的な In-café との連携が求められる。

3-3 東北スタディツアーの実践

東北スタディツアーは気仙沼市、南三陸町、東松島市、仙台市（東北大学）の4カ所での活動を行った。その中から、主な活動の概要とその意図を示す。

活動 気仙沼での活動 10/11（土）午後

【概要】

防潮堤建設の議論に揺れる気仙沼の大谷海岸と小泉海岸で、防潮堤建設について反対の立場を取っておられる地元の方に、震災被害の状況やこれまでの防潮堤に関する議論の推移について伺った。

大谷地区では T. P. 9.8m（T. P.：東京湾の平均海水面）の防潮堤建設が計画されているが、その高さや建設位置、工法などをめぐり、市民と行政の議論が続き、現在も建設の是非に結論が出ていない数少ない海岸の一つである。また、極力、専門家が議論に参加しないという形で話し合いが行われている点も珍しい。その後、実際に建設された T. P. 9.8m の野々下海岸の防潮堤も見学した（図7）。

小泉地区では、T. P. 14.7m の防潮堤建設が決まるとともに、並行して高台移転事業も進んでいる。かなり高い防潮堤であるが、被災した農地を防潮堤建設に利用してもらいたい賛成派住民も多く存在し、大谷地区とは全く異なった議論を進めていた。

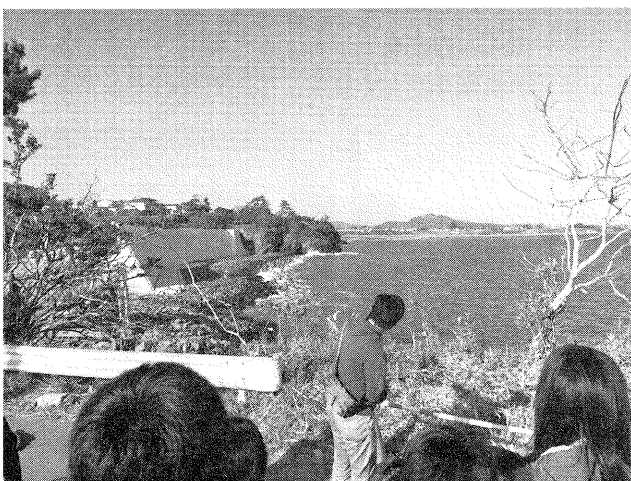


図7 気仙沼・野々下海岸の防潮堤での説明の様子

【意図・趣旨】

- ・気仙沼市における津波被害や復興の状況を調査すること

とができる。

- ・大谷と小泉の異なる地区での防潮堤建設の議論の状況を比較することができる。
- ・防潮堤建設に反対する市民の立場の意見を伺うことができる。
- ・実際に建設された防潮堤を見学することができ、どれほどの大きさのものなのか実感することができる。

活動 東松島での活動 10/12（日）午後

【概要】

東松島市の高台移転事業の一部である、森林の管理・保全作業を委託されている NPO の活動を、ボランティア活動として手伝った。具体的には森林の下草を刈り、整地するというものであった（図8）。

ボランティア活動終了後、復興事業を計画している東松島市役所の方から、被災状況や防潮堤建設の現状など伺った。東松島は他の自治体に比べて復興は素早く進み、現在も地区ごとの特徴を活かした復興がなされている。計画されている防潮堤は、T. P. 4.3m と比較的低く、建設に向けて市民の意見は好意的であり、むしろ安全確保のための二線堤の工事の話も出ている。復興の進まない気仙沼や南三陸とは対照的な復興の進み具合に、生徒たちも驚き、戸惑っていたようであった。



図8 東松島・ボランティア活動の様子

【意図・趣旨】

- ・東松島市における津波被害や復興の状況を調査することができる。
- ・復興が進んでいない気仙沼市や南三陸町に対して、復興が進んでいる東松島市の状況を比較することができる。
- ・具体的に体を動かすボランティア活動を通して、復興に直接参加でき、またその実感も得ることができる。

- ・復興計画を進める側である行政の立場の意見を伺うことができる。

なお、東北スタディツアーの評価や課題などについてはここでは省略し、加納・齋藤（2015）にまとめるものとする。
（文責：齋藤）

3-4 東北ボランティア

In-caféの東北スタディツアーと視点を変えた教科の取り組みをもう一つ紹介する。化学科では一昨年から山形大学の「やまがた『科学の花咲く』プロジェクト」に参加し、東日本大震災で被災した宮城県石巻市を訪れ、子供たちの実験教室に参加している。

今年は、ボランティア活動の一環として行っているこの取り組みに、本校生15名を連れて参加した。9月27日（土）、石巻イオンモールの1階のフロアは、太陽の広場、海の広場、緑の広場に区枠され、「子供たちの実験体験」と「ワクワクドキドキ化学実験ショー」を行った。実験体験のブースでは参加した生徒を5人ずつ3つのグループに分け、プラコップを使った「プラ板作り」（図9）、CD板を使った「ペンハムのコマ」、千代紙を使った「くるくる落下傘づくり」を担当した。いずれも小学生でも安全に、簡単に作れるように工夫をして、高校生が指導にあたった。はじめはどのように対応していいか、戸惑っていた生徒も、やって来た子供たちの笑顔に誘われて、だんだん積極的に行動するようになった。また、「ワクワクドキドキ化学実験ショー」では、アシスタントとして実験の演示を行った。



図9 楽しいプラ板づくり

3-5 石巻での学習

ボランティア活動に参加した生徒たちは、被災地の見学も行った。震災時の映像を見ながら、日和山公園の上から、北上川河口を見下ろした（図10）。震災時、ここに登って助かった人がたくさんいる。翌日は、語り部のボランティアの方を招いて、石巻市内を見学して回った。瓦礫こそ片付けられているか、海の近くには家が全く立っていない。まだまだ支援が必要だということを、肌で感じた生徒は多い。自分の目で見て、考えることの大切さを改めて感じた。

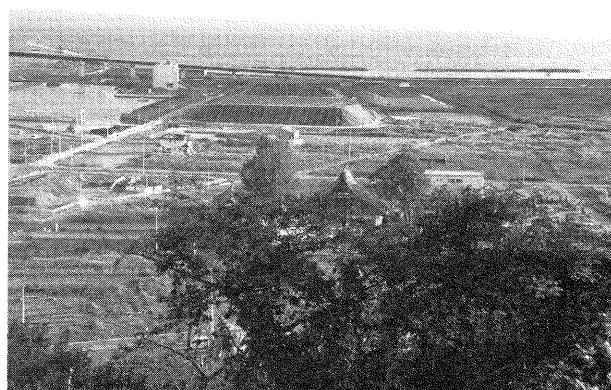


図10 日和山より北上川の河口を望む

さらに東北大学では、「被災した田んぼの調査」を行っている向井先生にお話を伺った。田んぼは人間が作り出した環境であるが、そこには沢山の生物が生きている。アース・ウォッチジャパンでボランティアを募って研究する意義や、被災から3年経った今、田んぼの復興はどのくらい進んだのかなど、ちょっと難しい内容であったが、研究の意図を詳しく説明していただいた。



図11 被災した田んぼの調査の講演

3-6 東北ボランティアの評価

参加した生徒に下記の項目で満足度の調査を行った。

東北ボランティア参加者の満足度と感想を表1に示した。

「実験イベント」「被災地学習」「東北大学の講義」ともに、高い評価であった。ボランティアという意識ではなく、色々な人との関わりを持つことによる深い学びを体験できたと思う。(文責：宮城)

表1 参加した生徒による東北ボランティアの評価

<p>1. 実験イベントについて (満足度：12345678910) ⇒平均 9.3</p> <p>◆とても楽しかった。子供だけでなく大人の方もいらしゃった。作っている子供たちがすごく喜んでくれたので嬉しかった。反省点はお昼と実験ショーとで人が足りなくなる時間ができてしまったこと、作り方の順序が何通りか出来る中でどれが一番作りやすいかという教え方についての話し合いなどをしていなかったことで、教える人によって作り方が違ってしまったことだと思う。実験ショーも最初は人が集まるか不安だったけれど、最後には席がいっぱいになってたくさんの方がクイズに参加してくれたので大成功だったと思う。(落下傘)</p> <p>◆小さい子供だけでなくお父さんお母さん、大人の方までこま作りに楽しんでくれていて、たくさんの方の笑顔が見れたのがとても印象的だった。みんな可愛かった!!実験ショーは、私たちがやったことをもっと来た人に体験してもらえばよかったなと思った。(コマ)</p> <p>◆家で作ったり、開始前に何度か挑戦して、(同じ班の人がハート型とかもチャレンジしててそういうのも楽しかったです)お客さんにはきれいな仕上がりのもので渡すことができて良かったです。子供たちの純朴に驚いている様子がかわいらしかったし、知らないことを知るの、素敵なことだと思いました。小さい子が好きで久しぶりに関わったので、それも嬉しかったです。このような取り組みを開催できたらいいなあ、と思いました。他の人がやっているブースも行ってみたかったです。(プラバン)</p>
<p>2. 被災地学習について (満足度：12345678910) ⇒平均 9.3</p> <p>◆実際に被災した方のお話を聞く機会は、めったにないので、今回2人の方からお話を聴くことができて、良かったです。1日目イオンモールでのボランティアで来てくれた方々は、皆とても明るい顔をしていたので、あまり大きな震災があったという事を感じなかったけれども、おかみさんやボランティアの方から震災当時の話や復興状況、イオンモールに来てくれた方の中にも仮設住宅に住んでいる方が多いという話を聞いて、あまり表には出さなくても、今でも大変な思いをしている人がたくさんいると気づけた。改めて1日目のイオンモールでのボランティアで少しでも楽しい時間を与えることができていたらいいな、と思った。</p> <p>◆華夕美のおかみさんのお話はおかみさんの主観で話して頂いたのでより臨場感というか現実味を感じました。ニュースなどでは伝えられない当時の様子を聞くことができ、もっと多くの人に知ってもらわなくてはいけないと感じました。市内では、震災の傷跡はあまり残っておらず、復興は進んでいると感じました。それよりも更地のままになっている住宅危険区域(?)を見ていると津波の恐ろしさを感じました。また、新しい家を建てられない人がたくさんいるというのを聞きやりきれなさも感じました。</p> <p>◆被災地のニュースは、テレビやラジオでよく見たり聞いたりしてはいたけれど、本当に経験した人の話を聞いたり、目で見たりするのは、今までの話よりもはるかに臨場感があり、震災への印象が変わりました。私たちは、震災というとても地震と津波しか想像しないけれど、実際の被災者の方々は、津波の後の生活こそ最大の難関であったことを知りました。本当の闘いはまだ、これからで、復興のために手をさしのべてあげる必要性を感じました。</p>

3. 東北大学の講義

(満足度：12345678910) ⇒平均 8.3

◆東日本大震災がどんなものであったか、から始まり、その津波がもたらした被害を生物学的観点でみるという話を聞くことができたと思います。めったにない災害だからこそ、その記録を残す重要性が分かりました。またその調査の大変さも知り、機会があれば、手伝いたいと思いました。カエルがとてもかわいかったです。

◆向井先生の生物の分散していること、被災2年目で多くの種が戻ってきたこと、人の手が入ることによってもたらされる命があることどれも有意義なお話ばかりで生物をもっと勉強してみたくなった。カエルの可愛さも印象的だった。東北大学は、自然が多くて広く、もう少しゆっくり滞在したかった…。

◆私は昨年の東北スタディツアーで田んぼの生き物調査ボランティアに参加させて頂いて、その時はあまりやっていることの意味や研究としての価値を理解できていなくて、ただただ楽しんでいただけだったのですが、今回向井先生のお話を伺って、研究について理解を深めることができたように思います。田んぼを「人為的にかく乱される」という風に捉えられていたのが「なるほど」と思いました。

4. 今回経験したことを広めるにはどうしたらよいか

◆福島、岩手などでも田んぼの調査をして宮城とどのような違いがあるか、放射能などの影響があるのかなどを調べて発表したらかなりおもしろく興味を持ってくれる人も多いと思うので、そこをうまく絡めて震災についての話を含んだりすると良いと思ったが、一緒に話すのは適切でない気がするのでブースだけで発表したりすると片方にしか興味がない人も両方読んで新たに興味を持ってくれると思う

◆何よりも周囲の人に話して伝えることが大切で、また、このようなイベントがあった時に他の人にも参加してもらえるようにすることが大切だと思う。東北スタディと一緒に宣伝してもよいと思う。

4 心理科学講座

「心理科学講座」は、東京学芸大学附属高等学校の高校生を対象に「インカフェ」の活動の一環として開講されたものである。今年度の方針としては、心理学という高等学校ではあまり学ぶ機会のない学問について触れることで、生徒一人ひとりが、様々な学問分野への関心を広げるような活動を目標に据え行った。そのため、本講座の初回に「心理学について、少し科学的にやってみよう」というテーマを掲げているから、講座の際はリラックスをして参加してもらいたい」と参加生徒へ伝えている。また、心理学で明らかにされている知識を、一方向的に教えるような講義形式は採用せず、実際に行われた実験などへの参加といった体験型の講義形式を採用した。

次に本講座で取り扱う内容の選定についてだが、毎回講座の最後に、参加生徒へアンケートへの記入を求め、そこに書かれた要望を参考に2題ほど講義者が内容を選ぶといった流れで行った。生徒からの要望としては、その時期に日本社会で話題となっている事件や問題から派生したトピックや、日常生活のなかで体験した出来事の中から心理学の学問領域に含まれそうなものが挙げられおり、本講座の主旨から外れない範囲で取り入れている。また、講座内容については、必要に応じて指導教官に助

言を頂きながら選定を行った。今年度の講義で扱った内容は、以下のようなものである（図12）。

- ・記憶のメカニズム
- ・嘘の種類と生理的反応
- ・非言語コミュニケーションの重要性
- ・錯視について
- ・「心理テスト」の虚偽性
- ・描画投映法について
- ・同調する人の心理
- ・色に関する心理学 など

これらの内容への生徒の反応としては、講座の最中に参加生徒同士で講座内容についての話をする場面が多々見られた。また、講座終了後にはとても楽しかったという感想を寄せる者、講座内容を踏まえた疑問点などを直接質問に来る者、アンケート用紙に書く者と様々であった。講座終了後に寄せられた疑問点や質問については、次回の講座の際に時間を設けて対応したり、その疑問について講座内容として取り挙げたりした。本講座全体を俯瞰すると、講義内容については生徒の興味・関心を引くものであったように思う。

参加生徒の割合についてだが、1年生の参加が最も多く、「インカフェ」のスタッフをしている2年生が数人参加している状態である。初回の講座には多くの1年生が参加したが、2回目以降からは参加生徒がある程度固定されているように思う。参加生徒の中には予定を空けて参加していた者もいるようで、参加している多くの生徒は本講座に、意欲的に参加しているように感じる。

本講座の構成としては、30分程度は心理学に関する知識の説明を行い、残りの30分程度はその講座内容に関する実験を実際に体験したり、YouTubeに投稿されている実験動画をみたりといった流れで行った。参加生徒は、自由にテーブルにつき、リラックスできる状態で参加するように促した。講座では、主にパワーポイントを使つての説明を行っていたが、講座内容を聞いている間の参加生徒の様子は、自分で準備した紙に内容のメモを取る者や、スライドを見て反応しながら説明を聞いている者などといったものであった。実際に実験に体験したり、動画を見たりする間は、時折笑顔や笑いが出るなど、和やかな様子で活動に参加していた様子が見られた。

今後の課題としては、講座の告知を挙げる。今年度は、講義者が事前にポスターを制作し、講義の一週間前に教室などに掲示してもらうといった形をとっている。しかし、一週間前の告知では、本講座へ関心を持つ生徒でも予定を調整することが難しいのではないかと感じた。より多くの生徒の参加があるためにも、ポスター掲示をお願いする時期はもう少し早めたほうが良いように感じた。この他にも、講座内容を簡単にまとめた資料の準備や、講座を受けていない生徒でも講義内容を振り返ることができる資料の作成などの工夫も必要であるように感じる。

来年度以降も、この「心理科学講座」が生徒の興味・関心を引き出し、自ら様々な学問について積極的に学ぼうとする姿勢の涵養に貢献できるものとなればと願う。

（文責：赤星）

5 Quest for Quest

～「やりたいこと」をともに考える～

5-1 活動の構想

昨今、「やりたいこと」が見つからないことに悩む若者が急増している。自分はどういったことに喜びを得られるのか？ どういった取り組みに充実感を得られるのか？ その取り組みのために、今から始めるべきことは何なのか？

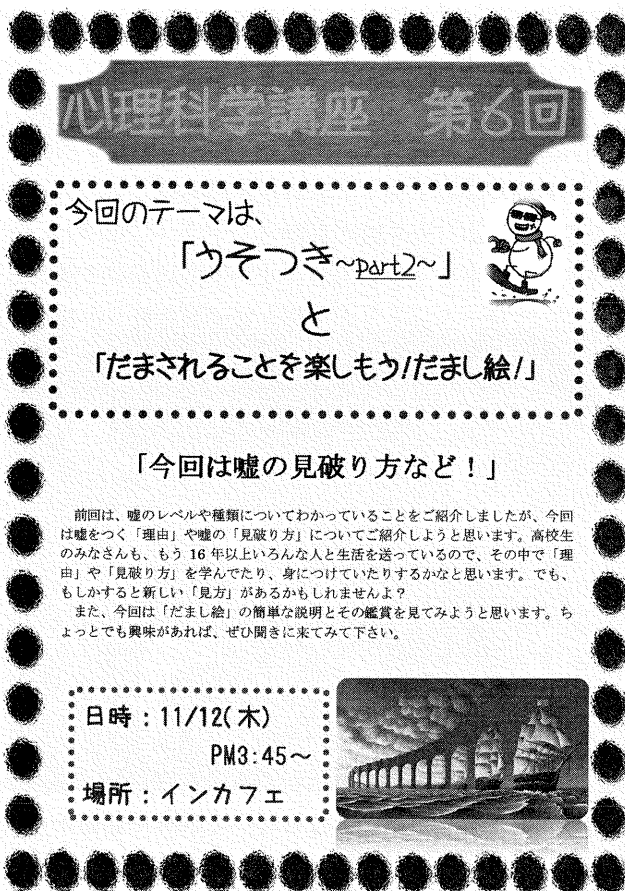


図12 心理科学講座のポスター

なかでもその様相が顕著に見られるのが就職活動である。1～2年後の春に就職を控え、どこでどういう仕事をするのか決断するその時期になって初めて上記の問いにぶち当たり、短期間でどうすればいいかわからない、あるいは改めて考えて興味の出た仕事がある現在の大学の専攻分野と全く異なる、といったケースに陥って「もっと早く考えておけばよかった」と後悔する学生も少なくない。そこで大学進学を考える高校生に対して大学生が「将来やりたいこと」を今の段階で自ら考えてみるよう働きかける、それが本企画（以後「Queque」と表記）の構想である。

5-2 活動内容

本企画は平成25年11月から平成26年12月現在に至るまで、平日の放課後や土曜日の時間を利用して不定期に行った。形式としては参加者が自発的に参加できるワークショップの形を取り、毎回募集して集まった高校生たちに対して任意団体 Unicul Laboratory に所属する大学生・大学院生数人で対応した。

不定期に何度も開催するものの、主なワークショップの内容は以下の4種類である（Unicul Laboratory ホームページより）。今年度はIn-Caféのスタッフとして新たなメンバーが多く加わるのが予想されたため、5つ目のワークショップを新たに作成した。詳しい内容・課題などは後述する。

①学大駅七変化☆わくわくまちあるき

身近な街を舞台に、普段自分が社会を見ている視点を確認しつつ、他者の視点で社会を見る体験をします。

社会は様々なモノ・サービス（＝価値）で成り立っていることに気づき、最終セッションにおいて、そのような社会に参画する疑似体験をします。

②教えて先輩！無限にひろがる人生路線図

前半部では、大学生のゲストの経歴を題材に、路線図に見立てたゲームのセッションを通じて、人生の選択肢とその組み合わせの多様さ・生き方の自由さに気づく機会を提供します。

後半部では、前セッションで出てきた疑問をゲストに直接ぶつけ、人から人生観を引き出し、人生設計のヒントを得る体験をします。

③ドリームプロジェクト！

「ドリームプロジェクト」という会社の営業マンに扮して、クラスメイトの「夢」の実現方法を考え、提案するロールプレイングを行います。

実際に「夢」を実現する方法を考える体験をしつつ、

障害克服の方法や夢が実現するイメージを持つことの大切さを体得してもらいます。

④ Quest for quest! ～人生の冒険に出かけよう～

前半では将来の夢を「無人島」、夢の実現に必要なステップを「寄港地の島」に見立てて、夢の実現に向けたルートマップを作成します。

後半では「寄港地の島に辿り着けない場合」（＝必要なステップが達成できない場合）どうするかを考えるゲームを通じて、自分の価値観をあぶり出します。

⑤理想の放課後をデザインしよう！

今年度入ってくる新入生を主な対象として、自分の興味・関心に沿った放課後の計画を立てるワークを通して、「理想」に向かって計画立てることは楽しく、役立つということを学びます。

In-cafe という場の特徴や不定期に開催していること等からどれか1回に単体で参加することも可能、という形式をとってはいるが、構想としては4回のワークに順に通して参加することで学びを得ていく形を基本路線としている。

以後、簡条書きの形で分けられている1つずつの作業を「ワーク」、ワークショップ全体の工程を「セッション」と呼ぶ。

5-3 今年度の活動

1.1.「理想の放課後をデザインしよう！」

4月16日(水)・21日(月)

参加者数：不明

内容

1. スタッフと参加者の自己紹介後、参加者が現時点で持っている「理想の放課後」を書き出してもらう。
2. 1.で考えた理想に対して「現実としてやりたくないけどやらなければいけないこと」を参加者へ書き出してもらう。また、その現実自分にとってどのくらい重要なのかも考える。
3. 参加者それぞれの放課後の過ごし方を書いた計画表を作成する。
4. 参加者はグループ内の1名をランダムに選び、その人の「理想の放課後」をグループ全員で考える。完成した計画表は「放課後」を作成される人に発表され、その人の意見も取り入れた計画表を完成させる。

通常のワークショップでは、1時間半～2時間程度のものを1セッション開催するのみであるが、今回はよ

り多くの新生を対象としたいという意図もあり、In-Café スタッフ側からの「1回だけのセッションだと参加しづらいため、セッションを2回に分けてみてはどうか」という意見を採用し、およそ1時間のセッションを開始時間をずらした2グループに分けて開催した。

1.2. 課題と反省

課題としてあげられたのは、4.のワークで「放課後」を作成されることになった参加者は、グループ内の他の参加者が作業している間、黙っていることにしていたのだが必然的に会話が生まれてしまったことであった。

このセッションに限らず、In-Café には議論好きな生徒が多く集まってくる。ワーク中の議論から話が逸れて、ワークに集中することができないという状況を避けるため、多少の雑談は許容しつつも参加者をきちんとワークに集中させるようにスタッフは動かねばならない。

セッションの時間をずらし2回に分けて開催する方法は概ね好評であった。しかし、Queque の全4回のプログラム上、セッションを1時間以内に収めることは難しいと思われるため、全4回のプログラムに導入することは現時点では考えていない。

2.1. 「学大駅七変化☆わくわくまちあるき」

5月28日(水)・6月19日(木)

参加者数：8名

内容

1. スタッフと参加者の自己紹介後、参加者たちに「学芸大学駅周辺にいると思われる人」を書き出してもらう。
2. 参加者は1.で出た人をランダムに選び、その人の立場になりきって学芸大学駅周辺を散策してもらう。
3. 教室に戻ったのち、参加者がなりきった人の視点から見て「ここは素晴らしい」「もっとこうの方がよい」と思った点をそれぞれあげてもらう。
4. 参加者は3.であがったアイデアから、「街をよりよくする案」と「悪いところを改善する案」を考え、発表する。

2.2. 課題と反省

ワークショップの開始前に行う人の呼び込みに時間がかかってしまい、2回とも開始予定時刻より大幅に時間が遅れてしまった。今後はワークショップ全体の時間に余裕をもたせ、ワークの中で臨機応変に時間の調節ができ

るよう念入りにシミュレーションを行うように取り決めた。

3.1. 「教えて先輩！無限にひろがる人生路線図」

9月19日(金)・22日(月)

参加者数：12名

内容

1. スタッフと参加者の自己紹介後、ゲストとして招いた大学生に自分の選んだ進路・これまでの経歴を話してもらう。参加者は大学生の話聞いて、大学生の選んできた進路を「路線図」のような形で図示する。(図13参照)
2. 1.で作成した路線図をもとに、自分ならどのような選択肢をとるかということを考える。
3. 2.で「自分が取るとは思えない選択肢をなぜ取ったのか」と疑問に感じたところを中心に、ゲストの大学生に質問をする。大学生がどのようなことを軸として進路選択をしてきたのかということを考える。
4. 今までのワークを参考にゲストの大学生の人生路線図を完成させる。

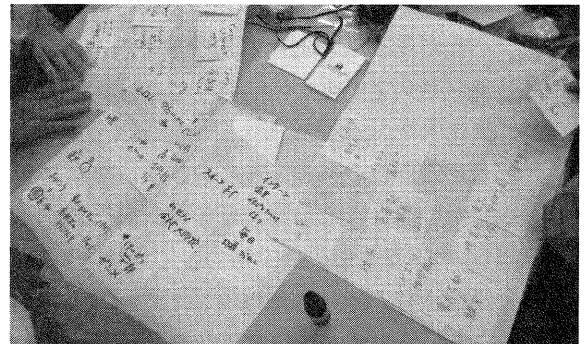


図13 人生路線図の例

3.2. 課題と反省

2回とも2班に分かれてワークを行った。今回のセッションでは、ゲストである大学生の話を聞き、その人の核となる価値観を引き出す方法と、人生の選択肢の豊かさを知ることが目標であった。質問の段階で大学生の核心に迫るような選択に関する質問が出た班もあったが、参加者の興味関心ばかりに沿った質問が集中する班も存在した。そのような班にはある程度こちらから質問を誘導して「価値観を掘り下げる」質問を誘発することも必要であるように思われた。

また、そもそも大学生の進路が参加者と全く異なる場合(例：大学生が理系学生、参加者が文系学生)は「自

分ならこのような選択をする」という部分に対して共感が持てず、アイデアを出すのに苦労していた。参加者とゲストの大学生のマッチングはあらかじめなされておくべきであろう。

4.1.「ドリームプロジェクト！」

11月8日（土）

参加者数：6名

内容

1. スタッフと参加者の自己紹介後、参加者たちに「自分の夢（やりたいこと）」と「夢の実現に必要なもの」をカードに書いてもらう。
2. カードをシャッフルし、参加者に1枚ずつ引いてもらう。参加者には引いたカードに書いてある夢の実現方法について考えてもらう。
3. 参加者はカードの持ち主が夢の実現に必要なものを考え、その解決方法を考える。また、夢を実現するとどのような体験ができるか、同じグループの参加者にインタビューすることで、カードの持ち主が夢の実現のためにモチベーションを高めることが出来るようにする。
4. カードの持ち主を明らかにし、参加者の考えた方法をプレゼンテーションする。カードの持ち主は、プレゼンテーションの内容に対する満足度を1～10点で評価・フィードバックを行う。

今回のワークショップは、Queueとしても初めて高校で実施する内容であった。また、In-Caféでは初めての土曜日の開催を試みた。その理由として、今までの平日開催では部活動に所属していない人、またはその日に部活動がない人限定になってしまうため、土曜日に開催することでよりまとまった集客が期待できることが考えられる。

土曜日の開催のほかに11月5日（水）にも開催を予定していたが、集客ができなかったためワークショップの開催は中止となった。

4.2. 課題と反省

土曜日の開催に関して、平日に開催するよりも多くの時間を取ることができ、ワークに集中できるという好意的な意見が参加者から多く得られた。一方で、今までは2～3人ほどいたIn-Caféスタッフ以外の参加者は1人もおらず、参加者はすべてIn-Caféスタッフであった。

ワークの内容としては、初めて実施したにも関わらず

細かな改善点を除けば参加者からは概ね好評を得ることができた。

11月の第3回、第4回ワークショップの開催を通して浮かび上がってきた課題として、集客方法と当日のIn-Caféスタッフの担当者に関する問題が大きい。集客に関して、Queueを運営するスタッフが大学生であるため、ワークショップの広報活動はIn-Caféのスタッフに大部分を頼ることになる。今まではわれわれが作成したポスターなどを教室の黒板などに貼ってもらうなどで告知をしていた。しかし生徒側からの「だんだんと後ろの黒板は見なくなっている」という意見や、「進路に悩んでいる人」に向けたワークショップの内容の性質上、口頭による広報活動が最も効果があると考えられる。そこで今後はIn-Caféのスタッフが口頭による広報活動をしやすいよう、ワークショップの内容をまとめた資料を送りそれに沿って広報を行ってもらうよう依頼することに決定した。

また、今まで開催日当日にわれわれのお手伝いや物品などの受け渡しを行うIn-Café側のスタッフの責任者を決めていなかったため不都合が生じた。そのため今後はIn-Café側から最低1名を当日の責任者としてお手伝いをしてもらうよう依頼した。

当日のスタッフに関する問題は第4回の部分で述べる。

5.1.「Quest for quest! ～人生の冒険に出かけよう～」

11月17日（月）

参加者数：3名

内容

1. スタッフと参加者の自己紹介後、参加者に自分の夢について他の参加者に向けて語ってもらう。
2. 1.で語った夢を「夢のかけら」としてワークシートの無人島に設置する。参加者には無人島に到達するまでの道筋として、夢の実現に必要なことを書き出してもらう。
3. 参加者は書き出したものを「具体的な行動」「技術を身に付けるもの」「精神的なもの」にグルーピングし、実現が必要な時系列に書き出したものを並べて無人島到達のためのマイルストーンを作成する。
4. 参加者同士でマイルストーンにあるもののうち1つを隠し、「実現できなかったらどうするか」ということを考えてもらう。他の夢（選択肢）が浮かんだら適宜追加する。
5. 参加者には4.のワークを通して、「自分が最も大切

にしている価値観」を考えてもらう。最後に参加者同士で自分のマイルストーンについて発表を行う。

今回のワークショップも11月22日の土曜日に開催する予定であった。しかし、In-Café スタッフの当日責任者の都合が悪くなってしまい開催は中止となった。

5.2. 課題と反省

前回の開催と同様、今回も内容面に関して大きな改善すべき点はあまりないと思われた。

当日のIn-Café 側のスタッフがやむを得ない事情で欠席した場合などの対策については、今のところ明確な解決案は見つかっていない。

また、依然として集客方法の問題も解決されていなかった。ワークショップの内容をまとめた資料を送ったが、それを使用した広報を行っていないのか、それとも広報を行ってはいるが集客ができていないのかは不明である。In-Café 側のスタッフにどのように広報活動をしているのか、改めて聞き取り調査を行う必要があると考えられる。

現時点でわれわれとしては、ワークショップ開催までのスケジュール一覧を明記した資料を作成し、開催するか否かの目安を示すことはできるのではないかと考えている。

参考資料：Unicul Laboratory ホームページ (<http://unicul-lab.net>)

6 生徒の反応

毎回5～10人程度の生徒が参加する。告知を行った際には、各内容のワークショップにおいて「どんなことを学べるか」よりも「何をするワークか」に関心を示す生徒がほとんどである。ワークを終えたあとの反応としては「自分の将来について考えたことがなかったが、やってみると新しいアイデアがたくさん出てくる」というものが多い。これらについては生徒側が主体的にワークに参加し自ら考えるワークショップの形式が生かされていると言えるが、それと同時に、自分の将来について考えたことがない／どう考えてよいかわからない生徒が少なからず存在することも示しており、冒頭で述べた「いざ就職活動が始まるまではそのことについてあまり考えようとしなさい、考える機会も与えられていない」という風潮が学生の間に根強く存在することを改めて確認できる。

7 課題

ワークショップとしての内容は今後も目下この内容で進めていく予定であるが、「やりたいこと」を見つけそこに至る手段もある程度見えてきた生徒に対して、その手段を実践する過程においても大学生の側で支援できるイベントを開催できないか現在検討中である。また、「やりたいこと」を見つけていく過程でそもそも世の中にはどのような仕事や人たちが存在するのかを知っていくことも重要であると思えるが、その学びを得る手段についても模索している。

また当初の構想が上記した通り「将来について考えることもしたことの無い学生にその機会を与える」であるが、ワークショップに自分から来てくれる生徒はそもそもある程度の好奇心を既に持っているとも言え、そうでない生徒をもっと気軽に参加できるような場にしていきたい、というのも今後の課題である。

さらに、前述したとおり、今学期に開催した第3回、第4回ワークショップから浮かび上がってきた課題も検討が必要である。

1つ目として集客方法に関するものがある。Queueのプログラムの性質上、参加者として想定することのできる生徒の人数は多いとは考えにくい。より効率の良い広報活動は、全体にイベントを告知したのち興味のあるような生徒を細かく誘っていく方法が現時点ではもっとも良いと思われる。しかしそのためにはわれわれだけではなくIn-Café 側のスタッフの協力が必須である。そのため、近々Unicul LaboratoryとIn-Café との会議を開催し、Queueに対する理解を深めイベントを開催するモチベーションを高く持ってもらう機会を考えている。

2つ目としてIn-Café 側の当日責任者に関する問題がある。第3回、第4回を開催した限りでは、In-Café の1年生のスタッフは、まだ自分が何をやればいいのか理解をしていないように見受けられた。2年生のIn-Café スタッフが引き継ぎを進めるとともに、われわれとしてもワークショップ開催当日までの日程をまとめた資料を作成し、「何をすればいいのか」と思っている1年生のスタッフの負担を減らしたいと考えている。また、学校外の講師や団体に関わるイベントでは、高校内で完結する部活動などとは異なる連絡手段、動き、広報活動が存在し、それにともなう臨機応変な対応が必要となる。このようにワークショップ開催までに多くの人的なリソースが割かれていることを、In-Café の1年生スタッフにはうまく伝達できておらず、それゆえに前述したような運営上の問題が発生しているのではないだろうか。

しかし、生徒が主体となって自由な運営が行われている In-Café はかなり貴重な体験ができる場であろう。スタッフ全員がそのことを理解し、改善に努めれば活動の幅をさらに広げることができると考えられる。もちろんわれわれとしてもワークショップの内容を絶えず改善し、内容を聞いただけで「行ってみたい!」と生徒が思うことができるようなものを創り出す必要があることも忘れてはならないであろう。(文責: 岸本・永瀬)

6 「人とつながる場」としての In-café

6-1 カフェテリアとの連携

「人とつながる場」の充実と拡大という観点から、昨年度から、学芸カフェテリアと連携事業を試行している。昨年度は、高校生を連れて、学芸大学のカフェテリアの訪問を行ったほか、学芸カフェテリアの講座への参加も行った。また、学芸大学のカフェメイツの学生も、本校の In-café 訪問し、相互交流を行った。昨年度の交流内容については、内山ら(2013)本校紀要, 51, 109-132. に詳しい。

今年度の大学生との交流については、本校のイベントの減少もあり、ほとんど成立しなかった。4月と10月にカフェテリアで行われた「ファシリテーション研修」に In-café のスタッフが1名参加したのが唯一の交流であった。そのとき、学芸カフェテリアでのファシリテーション講座の講師を務めていた日本ファシリテーション協会会長の田頭篤氏に、1月の本校での講座を依頼する予定である(図14)。

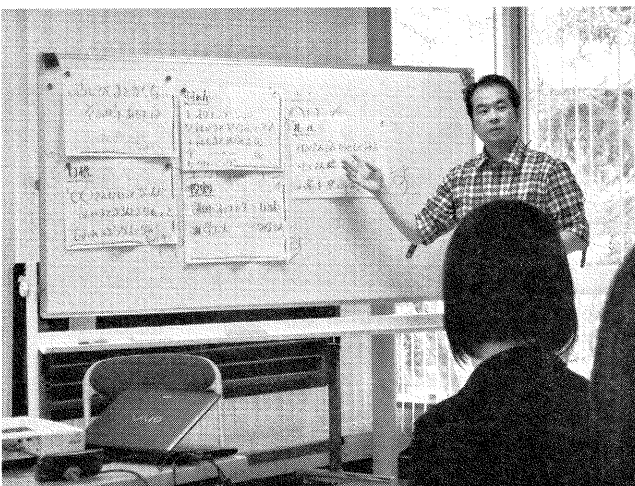


図14 ファシリテーション講座の様子

6-2 ちょっと変わった進路講演会

進路指導部と連携して、通常の進路講演会とは別に、In-café での「ちょっと変わった進路講演会」を行った。インカフェという場所をつくることによって実現した取り組みでもある。

通常の進路講演会は、理系、文系の様々な分野の大学生、大学を出てから数年経ち、第一線で活躍している卒業生など、いろいろな経歴を持つ卒業生の話を聞いている。そして、高校生活の充実や進路選択に生かそうとするもので、学年ごとに全員の生徒が対象である。

一方、本校の卒業生の中には、通常の枠にとらわれることなく、一度きりの人生を思う存分楽しんでいる人がいる。その人たちの生き方に関心を持った生徒たちが、In-café で話を聞くことができる機会が、「ちょっと変わった進路講演会」である。

7月に行った講演会では、ハーバード大学に進学し、その後、国連でインターン、ユール大学での修士終え、現在は、シカゴ大学博士課程で、「東日本大震災被災地の仮設住宅における生活支援について」研究している51期久間木宏子さんであった。久間木さんは、仙台で研究をするため日本に戻った時、本校に立ち寄ってくれた。

9月に行った講演会は、東京大学大学院医学系研究科で脳神経医学の博士号取得し、理化学研究所の脳科学総合研究センターから、基礎科学特別研究員として、フランスのボルドー大学 Valentin Nägerl 研究室にて、在外研究を行っている45期の有蘭美沙さんが、日本に滞在している時にお願いした(図15)。

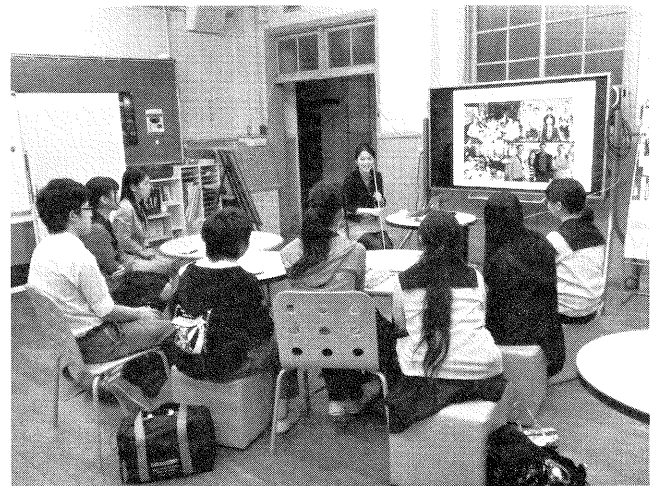


図15 ちょっと変わった進路講演会

有菌さんは、世界に1台しかないオーダーメイドの顕微鏡を駆使して、神経細胞の樹上突起(neuron)の研究を行うために、フランスに渡ったことや、研究内容とキャリア(海外で働くこと、研究者という仕事)について、楽しそうに語ってくれ、とてもアットホームな会となった。

これらのように、「ちょっと変わった進路講演会」は、やってくる卒業生の都合に合わせて、いつでも行えるという利点がある。そして、In-caféの「人とつながる場」としての役割を担う有効な取り組みである。

このほか、11月26日(水)には、木村歩美さん(46期:ラーニングデザイナー)、11月27日(木)には、志村哲祥さん(46期:医師)、12月2日(火)には、田中芽美さん(47期:女子プロボクサー)の講演会も行った。また、1月、2月、3月には、1年と2年をターゲットに、継続的に講演会を開催して行く予定である。(文責:宮城)

7 活動の評価

7-1 昨年度の課題

昨年度のIn-caféでは、運営に役立つ手法に関する講座を定期的に行った。これは、生徒の運営に関する学びを促進すると共に、自主的に「知のコラボレーション」に関するイベントを開催させることを狙ったものである。これに対してアンケート評価を行った結果、In-caféで掲げている目標のうち、「生徒主体の運営」は一定の成果を上げていたが、「知のコラボレーション」については成果があまり上がっていないという結果が得られた(内山ら、2013)。また、2013年の11月の時点では「生徒主体の運営」よりも「知のコラボレーション」の実現に興味があることも示された。これより、今年度の取り組みとして、いかに知のコラボレーションを促すかという課題があった。

7-2 今年度の活動

そこで本年度は、運営に役立つ手法の講座ではなく、知のコラボレーションを促せるような、創造的な活動に役立つ手法の講座を実施した。具体的には、創造的な活動を体験しつつ、その手法を学べることを目的に、10月までに以下の講座を実施した。

4月:カフェデザインの科学-カフェの歴史-

5月:カフェデザインの科学-アナロジーと創造性-

6月:実験心理学-有名な心理学実験をやってみよう-

7月:実験心理学-自分だけの心理学実験を作ってみよう!(実験作成)-

8月:実験心理学-自分だけの心理学実験を作ってみよう!(実験実施)-

9月:研究者の世界-博士になるまでの世界をのぞいてみよう!-

10月:研究者の世界-研究の入り口を体験してみよう!

このうち、4月と5月はIn-caféを新1年生向けに導入として位置づけた講座を行った。次に、6月~8月に実験心理学に関する一連の講座「実験心理学」を開いた。具体的には、まず有名な実験を紹介して自分達で追実験をするという活動を行った後、個々人で興味のある実験を組み立てて講座の参加者同士で実験をしようという活動を行った。その後、さらに高度な創造的な活動を行わせることを意図とし、9月と10月に研究方法に関する一連の講座「研究者の世界」を開いた。具体的には、研究の手順を紹介した後、第一歩として先行研究のレビューを取り上げ、自分達の興味のある分野のレビュー論文を池尻が準備して各生徒で読んでみるという活動を行った。これらの活動を通して自分達で興味のある分野の研究を調べたり、自主的に実験を行うことを促進させることを狙った。

7-3 評価

本評価では、上述した講座を含め、今年度の「In-café」での活動を通して、「知のコラボレーション」が生じたかを形成的に評価することを目的にする。

評価については2つの観点から行った。1つは、In-caféを通して何を学んだかという観点、もう1つは知のコラボレーションが起きていたかという観点である。

評価対象者は初期から運営スタッフとして携わり、積極的に企画・活動、イベントの参加を続けていた1, 2年生を対象にしている。なお、アンケートは7名から回収された。そのため、本評価は形成的評価の意味合いが強いことを注記しておく。

(1)スタッフの学びに関する評価

スタッフ達が何を学んだかについては、2013年11月に実施した質問紙の結果から評価を行う。質問紙では「In-caféを通して学んだことは何ですか? 思いつく限りお書き下さい。」と、「In-caféで学んだことは普段の授業や生活に影響していますか?」「[はい]を選んだ方は、具体的にどう影響しているかをできる限り詳細にお書き下さい。」の2点について自由記述で回答させた。

「In-caféの運営やイベントを通して学んだことは何で

すか? 思いつく限りお書き下さい。」の回答についてまとめたものが表2である。なお、番号は回答者を表し、後述する質問も回答者の番号は統一している。

これを分析すると、運営に関する学びが③と⑤と⑥と⑦の4人、創造的な思考や経験に関する学びが①と②の2人、その他が④の1人となった。これより、やはり今年度も生徒主体の運営に関する学びが多かったといえるが、一部で創造的な活動に関する学びもあったことがわかる。ただし、創造的な活動に関する①と②の内容を分析すると、やや受動的な姿勢が伺われる。

表2 Intelligent Caféを通して学んだこと

- ①色々な人と話すことによって自分の考えも深められるし、新しい考えが生まれる。
- ②何事にも積極的に参加してみると大体良い経験になる。
- ③運営の大変さ、面白さ。読書量の重要性。積極的行動の必要性。
- ④将来のことをこの時点(1年)でもうすでに考えていない人も当然いるということ。
- ⑤イベントの企画、進行、ハウトゥー。人を統制する力(現在進行形で学んでいます)。人の使い方。
- ⑥組織や話し合い、イベントを動かすことの難しさ。仕事相手とこまめに連絡を取り合うこと。ビジネス上の付き合い方。お金の扱いは大変難しい。組織にはみんながやりたくないことをやる人や陰で働く人がいること。ポスターをみやすく分かりやすく作るコツ。部屋のレイアウト学。カフェの作り方。ファシリテーション技術。仕事をともに乗り越えると深い絆が生まれる。人前で話す度胸。話をわかりやすく伝える話し方。文書の書き方(Wordの使い方や言葉遣いなど)
- ⑦引き継ぎ(1年の教育)の難しさ。理想と現実のギャップを埋める難しさ。お金をもらうことの難しさや責任。何かする時に目的(軸)を決めることの重要性。空間の用途を制限することでその運用がとても楽になる(そうはしなかったが)。依頼されたことの断りにくさ(立場的にはやるべきだけどコンセプトとはずれている)。時間の大切さ。やることを整理することの大切さ。ポスター作りのコツ。口コミの重要性。興味を持たせることの難しさ。立地が来場者数にどれだけ大きく影響するか。学校における先生の強さ。自由の難しさ。敬語やメールでのマナー。

「In-caféで学んだことは普段の授業や生活に影響していますか?」に関しては7人中7人が「はい」と回答した。そこで、「「はい」を選んだ方は、具体的にどう影響しているかをできる限り詳細にお書き下さい。」の回答についてまとめたものが表3である。

これを分析すると、⑤を除く6人が運営上のスキルが普段の授業や生活に影響していた。一方、②と④と⑦の3人の一部で、物の見方が普段の授業や生活に影響していたことが確認された。ここからも創造的な活動や知のコラボレーションにつながる物の見方や考え方に関する影響は確認されるものの、限定的であることがわかる。

表3 Intelligent Caféで学んだことが
普段の授業や生活に与えた影響

- ①人の話をきちんと聞くこと。色々な人の立場に立ってものを考えるようになった。
- ②人に自分の主張(ポスター等)を伝える時、心理学が役に立った
- ③ Q6(註:「In-caféを通して学んだことは何ですか? 思いつく限りお書き下さい。)」で書いたことを実践するようにしている。
- ④様々なテーマのイベントを行っているので、そのおかげで視野を広げることができた。
- ⑤進路選びの参考になった。
- ⑥先生が授業で何を意図し、伝えようとしているかを考えるようになった。大変なことではあってもはねのけられるようになった。下準備が大事だと分かった。友人が増えた。他人の判断基準を考えるようになった。授業でポスターや文章を書く場面、発表する場面で役立っている。カフェなどに入ると、レイアウトを確認するようになった。人に話をするとき、話す順序などを考えるようになった。おしゃれな家具があると見てしまう。先生との付き合い方が変わった。
- ⑦色々なことに慎重になった。やるべきことを洗い出して整理しようとするようになった。付箋を持ち歩くようになった。街中でカフェを見た時に興味を持つようになった。庭などで照明や家具の配置が気になるようになった(空間デザイン)。敬語に慣れた。メールの形式などに気を遣うようになった。

(2) 知のコラボレーションに関する評価

In-caféがスタッフに対して知のコラボレーションを

促進したかについては、「In-café で行われたイベントの中で、「知のコラボレーションが起きた」と感じたイベントはありましたか。」「はい」を選んだ方は、そのイベント名と内容をできる限り詳細にお書き下さい。(複数可)」「はい」を選んだ方は、具体的にそのイベントのどのようなシーンで「知のコラボレーションが起きた」と感じたのかを、できる限り詳細にお書き下さい。(複数のイベントがある場合はそれぞれお書き下さい)」という一連の質問を行い、自由記述で回答させた。

その結果、「はい」と回答したのは7人中③の1人だけで、イベントとしては、「東北スタディ前の原発に関するイベント。親の世代や教員と共に民間側の話を原発について考えた。」というもの、知のコラボレーションの内容としては、「2つの立場を考えた上で親世代の考えと教員の考えを新しく知ることによって今まで考えていたことが変わった。」というものであった。

また、知のコラボレーションまでとはいかなくても、日常的にコラボレーションの場として利用されているかを評価するために、「学期中、イベント以外で1週間に何日程度 In-café に訪れましたか。」「1日」以上と答えた方は、その時の主な目的もお書き下さい。(複数可)」という質問も行い、自由記述で回答させた。

その結果、平均利用日数は1.5日、標準偏差は1.2であった。しかしその内実を見ると、表4のようにほぼ運営のために利用されており、コラボレーションに関する利用は⑦で一部見られただけであった。これらを考慮すると、知のコラボレーションに関してはあまり促進されていなかったといえる。

表4 Intelligent Café の主な利用目的

- | |
|---|
| ①スタッフミーティング、イベント、1人の空間がほしくて |
| ②インカフェスタッフのミーティングのため |
| ③2学期に入ってから本格的にスタッフ活動を始めたため。スタッフミーティングの他、昼休みなど1人で何か作業をしたい時に。 |
| ④広告イーゼルを書く。インカフェの掃除。その他雑務。 |
| ⑤なし |
| ⑥なし |
| ⑦物の整理（インカフェの物品）。友達と雑談。考えごと。ミーティング（模擬裁判選手権など）。宣伝やイベントの準備。掃除。 |

7-4 考察と次年度に向けた改善策

以上の評価を総合すると、In-café で掲げている目標のうち、「生徒主体の運営」については継続して一定の成果が上がっているものの、「知のコラボレーション」については今年度も課題が残ったといえる。

ただし、部分的ではあるものの、講座を通して創造的な思考や物の見方や考え方につながる学びは確認された。これについては、池尻が行った10月の講座「研究者の世界」後のアンケートの回答からも伺える。例えば、「レビュー論文を読んで気付いたことや学んだことをお書き下さい」という項目に対する「意外と自分が普段やっているような方法で研究が行われており驚いた」という回答や、「講座「研究者の世界をのぞく！&体験してみよう！」に対する感想を自由にお書き下さい」という項目に対する「他の分野にも面白そうな内容があり、また自分の興味のある内容に応用できそうなので感動した」、「自分の興味がある分野のレビュー論文を持ってきたので積極的に考えていくことが出来ました。レビュー論文から疑問点を探す作業など、今後参考になると思います。」などの回答がこれに該当する。

しかし、一方で知のコラボレーションを引き起こすようなイベントが少ないことも明らかになり、スタッフ内のIn-café 利用も創造的な議論に結びつくような利用形態になっていないことも示された。

この原因として考えられるのが、「実践共同体」の未形成である。「実践共同体 (Communities of Practice)」とは、「共通の興味関心を持つメンバーが、互いにコミュニケーションしながら共同の活動に従事するコミュニティ」と定義される概念であり (Wenger, 1998)、学習を社会的実践の場への「参加」と捉えている点が特徴的である。

この概念に沿って考えると、In-café で創造的な活動や知のコラボレーションを促すには、個々人に対して知的な刺激を与えたり、創造的な活動を行うための手法を体験してもらうだけでは不十分であり、月1回などの外部講師による講座では限界があることがわかる。なぜなら、ある興味関心に沿った「共同体」を形成するサポートが困難だからである。実際、池尻はできるだけ参加者の予定を考慮した上で連続講義を実施したが、他の予定で全て参加できない生徒が出てしまい、実践共同体を形成するのが困難であった。また、講座で個々人が何か興味を持ったとしても、物理的な距離の制約により、その活動を継続的にサポートしにくいという問題点も明らかになった。

そのため、次年度に向けた改善策としては、日常的に学校にいるメンバーを中心に、いかに興味関心を披露し合い、継続的な活動を保証する仕組みを設けた上で「実践共同体」の形成を促進させられるかがポイントになるといえる。

これを踏まえた改善策の方向性としては、大きく以下の2つが考えられる。1つは、今年度行った創造的な活動を行うための手法に関する講座に加え、同じ興味関心を持つ生徒同士を接続してあげるようなイベントを盛り込む方法である。具体的には、昨年度に行われた「10min. Talk」などのような会を通して興味関心の近い生徒同士の顔合わせを行い、徐々に探求的なテーマを浮かび上がらせ、実現させるための手法を教えていく方法が挙げられる。

もう1つは、実践共同体の中心人物を教師に設定し、各教師の創造的な思考を生徒に触れさせつつ、授業では扱いにくいような興味関心を核に実践共同体を作る方法である。具体的には、池尻が東京大学で実施しているUTalkというゲストを呼ぶカフェイベントを応用し、ホストが池尻、ゲストで毎回異なる教師を呼び、教科以外で取り組みたいと思っていることや面白いと思っていることを紹介し、共感した生徒と接続することで実践共同体の形成のサポートをする方法が挙げられる。この方法の場合、日常的に学校にいる教師が中心となっているため、少人数でも実践共同体が成り立ち、かつ生徒が継続的に相談できる点がメリットである。

このような実践共同体の形成に向けた具体的な運営方針のデザインと、それに伴う学習の評価に関しては次年度の課題とする。
(文責：池尻)

8 今後の課題

In-caféの活動も3年目を迎えたわけだが、以上の報告からもわかる通り、今後に向けてのいくつかの課題が見えてきた。以下に総括したい。

①やりたいことをやってみる

In-caféの活動の原点ともいえることだが、今年度のイベントの少なさという反省点を振り返ってみて、とにかくIn-caféスタッフがやりたいと思っている企画をやってみるということが挙げられる。その際に重要なのは、失敗を恐れないということである。In-caféは「知のコラボレーション」の場として運営がなされている。そこは自由な学びの場であり、何かを新たに始める時には失敗はつきものである。そして、例え失敗したとしてもそこから学べることで、新たに生まれることが必ずある

はずである。本校の生徒は考える事で立ち止まってしまう、なかなか一歩先へ進もうとしない傾向がある。ただ、安心してIn-caféスタッフがやりたいことをやれるように、イベントをまわすシステムや教員側の柔軟なバックアップ体制の確立が必要だろう。

②いかに人を集めるか

アンケートや各報告からもわかる通り、魅力的な企画が行われていても、参加者がIn-caféスタッフや固定されたメンバーになってしまっている現状がある。生徒にとって放課後の部活動は大きな拘束力があるが、ニーズのある企画ならば参加者も増えると考えられる。In-caféスタッフのやりたい企画をやると同時に、多くの生徒が参加したい企画を立案する必要もあるだろう。企画した後は、それを周知する工夫も必要だが、SNSを活用した宣伝は既に整えられている。これらは、一度使った人には便利なものだが、初めての人や存在自体を知らない人には伝わりにくい。2-4にもあった通り、口コミというのが意外な効果がある。昨年度などでも、教員が行った講座では、自らの授業で宣伝もする為、人が集まるといった現象が見られた。この辺りなども宣伝の一つのヒントになるだろう。

③SGH アソシエイトとしての活動

今年度から、本校はSGH アソシエイト校としての認定を受けた。それに伴い、In-caféで行う外国語講座の企画が動き出した。具体的には、韓国語とタイ語である。韓国は、高校2年生で行く学習旅行の活動場所の一つであり、タイとはSSHで交流が始まっている。これら二つの外国語は、それぞれの活動において、現地での交流を含め、継続的に学ぶ意義の高い言語である。外部から講師を招き講座が行われるわけだが、その講座の運営をIn-caféのスタッフが行う。今後はSGH関係の企画が増えることも予想されるが、SSHとSGHをつなぐ存在として、In-caféの重要性はより大きくなっていくと考えられる。

このように、大きく3つの点が課題として挙げられる。せっかく自由に「知のコラボレーション」を行える場があるので、それをより有効に生かしていく為に、現状の課題点を整理し直し、より発展的な今後の活動に結びつけていきたいと考えている。
(文責：塚越)

9 参考文献

- 1) 宮城政昭, 斎藤洋輔, 池尻良平, 原田和雄 (2013) Intelligent Café の運営とコーディネーションの育成 -SSH の取り組みと新しい学びの形の創出-. 東京学芸大学附属高等学校紀要, 50, 97-118.
- 2) 内山正登, 川角博, 斎藤洋輔, 坂井英夫, 塚越健一郎, 宮城政昭, 池尻良平 (2013) Intelligent Café における新しい学びの取り組み -コーディネーション能力の獲得と学芸カフェテリアとの連携-. 東京学芸大学附属高等学校紀要, 51, 109-132.
- 3) 加納隆徳・斎藤洋輔 (2014) リスク社会と防災～ 政府は市民の命を守るために合意形成できるのか ～, 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 51, pp.33-50
- 4) 加納隆徳・斎藤洋輔 (2015) リスク社会と防災 (2) ～生徒の行動を促すカリキュラムの開発～, 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 52, pp.53-68
- 5) ライチェン D. S.・サルガニク L. H. (2006) キーコンピテンシー ～国際標準の学力をめざして～, pp.88-121
- 6) Wenger, E. (1998) Communities of practice Learning, meaning, and identity. The Press Syndicate of the University of Cambridge.